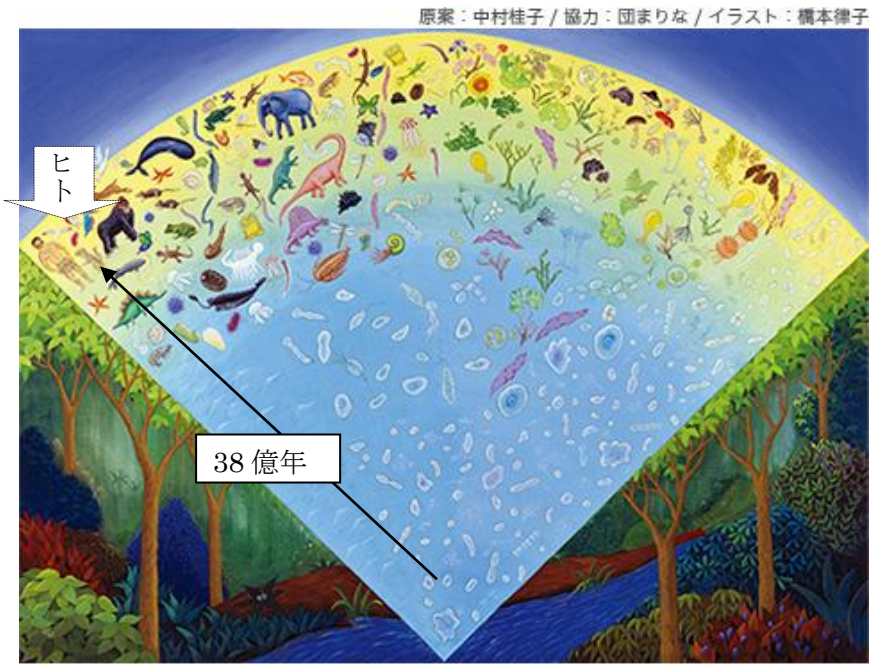
「生きる力とは」の講演を聴いて

2/5/2013

北村社会福祉士事務所
代表　北村弘之

ある勉強会があり、標題の講演の内容をまとめてみました。
講師は、JT 生命誌研究館の中村桂子先生です。理学博士でもあります。
「生命誌」とはあまり聞きなれない言葉ですが、人間も含めてのさまざまな生きものたちの「生きている」様子を見つめ、そこから「どう生きるか」を探す新しい知、ということです。
「生きてるってどういうこと？」生きものを見つめ、研究し、その過程や成果を表現することを通して、自然・生命・人間について考える場（ホール）が、大阪府高槻市にあります。
その生命誌研究館のコンセプトは、「我々は社会の一員であると同時に、ヒトという自然の一部であるという認識を持って生活することが大切だ」ということです。



扇の要（かなめ）は、地球上に生命体が誕生したとされる 38 億年前。以来、進化によって多様な生物が生まれ、扇の縁、すなわち現在のような豊かな生物界になりました。真核細胞の登場、多細胞生物の登場、長い海中生活後の上陸や種の爆発など、ドラマに満ちた生物の歴史物語が読み取れます。一つひとつの生きものが持つ歴史と多様な生きものの関係を示す新しい表現です。人間は扇の中にいること、すべての生きものが同じ 38 億年の歴史をもつ存在であることに気づいてください。（生命誌 HP より）

ここからが講師の話と私の感想です。（文責北村）

水害で被害にあった兵庫県豊岡市のこどもたちと接したとき、活動の様子を見ているうちに「生きる力」とは何かがわかってきたことです。まず、彼らはいつも「素晴らしい笑顔」を見せてくれます。そして「自分で考えて行動し、交渉する能力」があります。自分だけの意見を押しつけるのではなく、「本当にやりたい」という気持ちが子どもたちを動かしているのです。
この優れた能力は大人に教えられたものではなく、他の生物とつきあい、他の人間と付き合っていくうちに自然と身につけたものなのです。これがまさに**「生きる力」**なのだと思います。

人間は自然の中に生き、自分たちの持つ想像力を働かせ、何かを創っていく。それが生物として本当に大事なこと、本当に生きることではないかと思うのです。

これらをまとめると、ヒトはつぎのようなものを持っているということです。
・過去のこと知り、将来を考える**「想像する力」**
・物があったら分けあうという**「分かち合う心」**
・**「世代を超えた助け合い」**

考えてみれば、我々ヒトの英知とは、脈々と生きてきた先祖の創り物であり、さらに発展していくものであることに間違いはありません。
科学技術や金融経済の時代は、
・効率至上主義
・何にでも正解は一つであるという信仰
・すべてを量で測っている
このような状態ではヒトはますますつらい思いをして生活をすることになります。経済や技術が先にあるのではなく、それらは「生きるため」にあるのではない、と言われていることも私には印象に残りました。本当にそう思います。幸福においても、ひとりだけ幸福になることはできず、ほかの人を幸福にすることで自分も幸福になる、それが本当の社会なのではないでしょうか。考えさせられます。

講演の中で次のようなことも話されていました。
20 世紀は「機械と火」の時代であったが、21 世紀は「水と生命」の時代だと。生きものにとって水は大事だと言われますが、むしろ水があったからこそ生きものが生まれたのです。水あっての生きもの。もちろん人間も生きものです。20 世紀の科学技術文明は「機械と火」の時代であり、一見、快適さ、便利さを手にしたかのように見えました。ところが、その結果、「生命と水」が危機に瀕しています。「生命と水」を生かした真の意味での快い暮らしを取り戻すにはどうすればよいか？
それを深刻に考えずにすむようにしたいものですとのこと。私も同感です。

次の言葉は、農業体験をした子供達の感想文集の表紙タイトルです。
「つながりの中に自分がいる」 生かされていることを知った上での言葉なのでしょう。
また、国富論で有名なアダム・スミスは「富の重要な役割は人と人をつなげること」とも言っています。今さかんに「絆」という言葉が言われますが、経済の基本は人を思い、人とつながることだというのです。
私も、人間は自然の一部であることを謙虚に反省すべきであると思います。

以上